

社会対話「環境カフェ」の実践  
 —「環境カフェ駒場」の開催を例に—  
 Practice of social dialogue “*Kankyo Café*”  
 As an example of holding “*Kankyo Café Komaba*”

多田 満\*, 石水 極子\*\*

TADA Mitsuru\*, ISHIMIZU Muneco\*\*

\*国立環境研究所, \*\*東京大学教養学部

[要約] 環境（「主体」「境界」「つながりや関係、相互作用」）や「文化と文明」、環境問題は「科学文明の病」、日本固有のリスク論「安全と安心」などのキーワードにより、学部生と院生、各2名を対象に東京大学駒場キャンパス内で「環境カフェ駒場」を開催（2016年度に4回）した。第1回のレポート（感想）では、テーマに沿った内容のポイントとなる点や新たな「気づき」につながる記述がみられたが、専門的な知識の理解につながる解説に比べ、共感につながる対話の時間を十分に取る必要があると考えられた。第2回のレポート（理解と共感）では、文理を融合したアプローチに共感がえられ、今後は「（科学）文明」に代わる新しい人間の在り方・価値を発見するためにも「環境に関するキーワードを挙げて自由に語り合う」ことの継続が望まれた。

[キーワード] 安全と安心, 環境カフェ, 社会対話, 文化と文明, 理解と共感

## 1 はじめに

専門家（研究者）と市民の対話重視の社会状況のなかで、2015年度から東京やつくばをはじめ全国各地ではじめた社会対話の実践の一つに「環境カフェ」（多田 2016a, b, 多田 2018a, b, 多田・戸祭 2018）がある。それは大学内や公共のカフェなど日常の生活の場において、研究者と一般市民（高校生以上）が気軽な雰囲気の中で対話の場を作ろうとする試みである。

「環境カフェ」は、環境（研究）に関するテーマについて、参加者の対話により研究者と一般市民の理解を深め、共感を促すこと（共感の場）を目的とする社会対話である。対話は基本的に対等な人間関係の中で、相互性がある個人的な話し合いであり、その人の個性とか人格を背景に、自己を開放した話し方である（暉峻 2017）。

「環境カフェ」は、その対話を通じてともに「学ぶ」「考える」ための実践（協働）の場であり、環境（研究）に関するテーマについてすべての参加者が対等な立場でみずからの経験を聴き合うことで、あらたな「気づき」とそれに

よる「経験の向上」につなげることを目標とする（多田 2018b）。

「環境カフェ」を学内や公共のカフェにおいて、2015年4月から2018年3月までに合計56回、述べ305人（平均5.4人/回）の参加で開催した（多田 2018b）。本報では、まず学内での「環境カフェ」の方法について、その後の「環境カフェ本郷」（多田 2018a）開催のきっかけとなった大学内の「環境カフェ駒場」について環境（研究）に関連するテーマやキーワードと、開催後に提出された参加者の感想や理解と共感に関するレポート結果について報告する。

## 2 大学内での「環境カフェ」の方法

大学内の教室などを利用して、全体で90～120分程度、4～6名の学部生や院生の参加により開催する。開催時には、参加者全員が対話を通じてともに「学ぶ」「考える」きっかけ作りのために、参加者はテーマにかかわる「興味や関心のキーワード」や「イメージされる言葉」などを付箋紙（75 mm×75 mm）に記す。専門的な内容にかかわるスライドや印刷資料と共に、各人

が記した付箋紙をもとに参加者がみずからの経験（感じたこと，知ったこと，考えたこと）を公平に聴き合う（対話）ことで，テーマに関するあらたな「気づき」とそれによる「経験の向上」につなげる。

対話を通じて想像力の中で他人の「経験に参加」することで，個人の日常の出来事の中では得られないような事柄と接触し，個人の経験を拡大し，あるいは日常経験したものをさらに鋭く観察，認識させられることにより，その経験を深化することができる，すなわち個人の「経験の向上」につながると考えられる（多田 2018b）。

さらに毎回のテーマを通して生命（人）と自然，社会（経済）のかかわりの理解（国立環境研究所）から「人間であること」「いかに生きていくか」をともに学び，生活の価値（生命をよりよく活かすこと）を考える（多田 2015）。

### 3 「環境カフェ駒場」の開催

はじめに表 1 に示したテーマに基づくキーワードや言葉を参加者それぞれが付箋紙に書いて，第 3 回以外はそれらをいくつかのカテゴリーに分けてお互いに聴き合うことで理解と共感につなげた。終了後日，内容に関する感想（第 1 回）と「理解に関すること」「共感に関すること」（第 2 回）について，参加者はそれぞれレポート（自由記載）の提出をおこなった。

### 4 「環境カフェ駒場」のテーマとキーワード，ならびに開催報告

「環境カフェ駒場」（全 4 回）で取り上げたテーマとキーワード（カテゴリー）を表 1 に示した。第 1 回（2016 年 6 月 6 日）は「環境カフェ」の基本的なテーマとして「環境」そのものの理解を深めることを目的におこなった。「環境」についてイメージされる言葉を聴き合い「自然」「社会」「文化」とのかかわりから理解を深めた。さらに「科学的に考えることがよいことである」という認識が多くの人びとに受け入れられ，

表 1 「環境カフェ駒場」で取り上げたテーマと「問いかけ」（類型）

回	テーマ	「問いかけ」（類型）
1	地球の未来—「環境を考える」	「環境」（自然・社会・文化）
2	地球の未来—「環境を考える」2	「環境」（自然・社会・文化），文化・文明
3	「環境問題は人間問題」でも，ほとんど化学物質問題	「地球環境問題」
4	環境研究—ミジンコからみる化学物質問題	「興味や関心のあるもの・こと」（自然・社会・生命）

また科学的知識を活用して開発された技術，すなわち科学技術が社会（政治・経済などを含めた）に深く浸透している文明」（鈴木善次 2014）と科学文明の定義をおこない，日本文化と科学文明の比較により環境問題とのかかわり，ならびに日本文化の源流としての縄文文化について解説をおこないその理解を深めた。

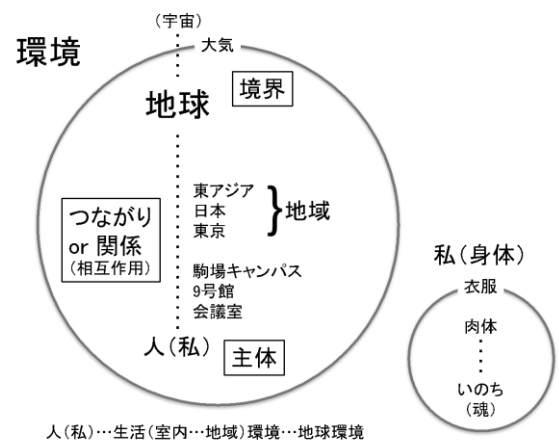


図 1 環境についての概念図

第 2 回（2016 年 6 月 18 日）は前回と同様に「環境」についてイメージされる言葉を聴き合い，環境の 3 要素である「主体」「境界」「つながり

or 関係, 相互作用」について地域と地球との関連について理解を深めた(図1)。さらに地球との関わりで私(身体)について考察をおこなった(図1)。また、「人」「人間」「人類」をそれぞれ関連づけて定義をおこない(図2), 一人ひとりの人間である「人」について図式化をおこなった(図3)。さらに「文化」と「文明」についてイメージされる言葉を聴き合い, 文化と文明を自然との関係で整理した(図4)。「文明」を「自然を壊してきたもの」と捉えて環境問題は「科学文明の病」と述べて。

第3回(2016年10月1日)は, はじめに前回のレポートを参考に, 「文化」と「文明」の比較について図4を改変してスライドに示した(図5)。その後, 「『環境問題は人間問題』」でも, ほとんど化学物質問題をテーマに自然災害のリスクや環境リスク, すなわち「環境汚染を通じて人の健康や生態系に好ましくない影響を与えるおそれ(それぞれ健康リスクや生態リスク)」(環境省)などリスクの源泉と類型化(日本リスク研究会 2006)をおこなった。豊洲市場の地下水汚染に関する「安全性問題ない」との新聞記事をもとにリスク(好ましくない影響を与えるおそれ, 可能性や確率)と安全, 危険の関係について理解を深めた(図6)。

「環境を考える」……人  
 ヒト……*Homo sapience*(学名)…生物種  
 人間……その時代や社会(地域)に生きる人びと、間——時間と空間……環境  
 人類…… の人間すべて

図2 人間と人類の関係  
 人類の空白部分には「過去, 現在, 未来」が入る。

…人間人間人間人間人間人間人間…  
 …人間人間人間人間人間人間人間…  
 …人間人間人間人間人間人間人間…  
 …人間人間人間人間人間人間人間…  
 …人間人間人間人間人間人間人間…  
 …人間人間人間人間人間人間人間…

間……環境(自然、社会、文化)によるつながり  
 人……ひとりひとりの人間

図3 人間の模式図

文化と文明	
文化(culture)	文明(civilization)
里山	都市
自然から近い暮らし↓	自然から遠い暮らし↓
自然を守ってきたもの	自然を壊してきたもの
→親近、共存・共生	→疎遠、分離
自然物の管理↓	人工物の管理↓
循環、持続	成長、拡大
(例)縄文文化	ヨーロッパ近代文明(科学文明)

図4 文化と文明の関係

「文化」と「文明」

日本「文化」	科学「文明」
より身体的、人間性	
地域性、多様性	— 巨大化、均一化
小規模、本来的(自然)	— 大規模(地球レベル)
農村生活……自然とともに	— 都市生活……人工的な
にある暮らし(自然共生)	暮らし

文化的価値観に基づく新たな「文明」の構築

図5 文化と文明の関係(図4の改変)

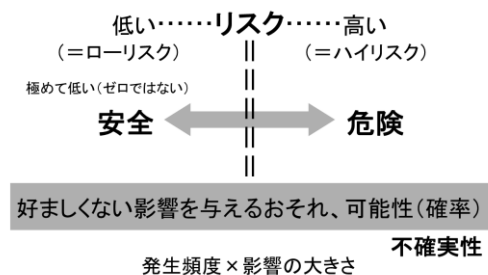


図6 リスクと安全, 危険の関係

さらに化学物質の法規制と制度についての概要を述べて、日本固有のリスク論である「安全と安心」について、安全は損害がないと客観的に判断される「科学的根拠をもって政府が定めるもの」（法制度）と、安心は個人の主観的な判断に依存する「主観的概念であるので個人個人が判断するもの」とそれぞれの定義をおこなった。さらに「人びとの安心を得るための前提として、互いの信頼がなければ、安全を確保し、さらにそのことをいくら伝えたとしても相手が安心することは困難である」ことを述べた。化審法による化学物質の定義についてもふれ、世界で合成された化学物質が1億2千万種を超えている（2016年10月10日現在）ことなどについて述べた。

最後に地球環境問題の特徴についてイメージされる言葉を聴き合い、その「問題群化」と「不確実性」について、さらに環境問題への対応について「地球」「社会」「人間」レベルから検討した。「人間」レベルでは、「人間倫理（世代間倫理）」について述べた。

第4回（2017年3月24日）は、それぞれの「興味や関心のあるもの・こと」をキーワードに「自然」「社会」「生命」のかかわりについて理解を深め、それらのことが環境研究につながることを述べた。つぎに自身の研究テーマ「ミジンコからみる化学物質問題」における「自然」「社会」「生命」のかかわりについて、それぞれ食物連鎖（藻類—ミジンコ—魚類……生態系）や化審法（化学物質審査規制法や農薬取締法）、繁殖（繁殖試験……生態影響）を例に挙げることで化学物質問題の理解を深めることができた。さらに「オオミジンコを用いた農耕地と市街地における河川水の複合毒性評価に関する研究」に関する解説（スライド）で、実際の調査研究についての理解を深めた。

## 5 「環境カフェ駒場」のレポート結果

開催後の「環境カフェ」の感想についてのレポート（第1回）と「理解に関すること」「共感に関すること」のレポート（第2回）の結果

から、下記のように各回のレポート結果に基づいて要点となる箇所の整理を「方法」と「内容」（第1回）、「方法」と「内容」「理解」「共感」「今後」（第2回）に関することに分けてそれぞれおこなった。

### 5.1 第1回のレポート結果

「方法」に関すること：

- ・みんなで向かい合って座ったおかげか、アットホームで落ち着いた雰囲気の間になっていた。そのため、気楽に自分の意見を述べる事ができて良かった。

「内容」に関すること：

- ・「環境」は「主体」と「境界」によって定義されるもので、主体によって環境というものの視点が異なり、幾重にも階層構造になっているということに納得できた。

改めて自分というものと周囲の空間・環境との境界を意識し直すことができた。

- ・地球環境や環境の未来について話し合えなかったことは残念であったが、自分とは何なのか、そして周囲とどのように関わっているのかを考える良いきっかけとなった。

- ・「環境」には境界があって、人間が生きている今という時間と、地球という空間的な境の内側を「環境」とよぶという認識が新鮮だった。

- ・「どこまでが環境の内側で、どこからが環境の外側か」という認識は、結局のところ人間が恣意的に生み出すものであると言える。例えば、地球温暖化の原因になっている温室効果ガスを吸収して、深海中に処分することで温暖化を防止する技術が検討されているが、この時我々は「深海中」を「環境」とは見なしていないだろう。

以上のように、第1回のレポート（感想）では、テーマに沿った内容のポイントとなる点や新たな「気づき」につながる記述がみられたが、専門的な知識の理解につながる解説に比べ、下記の感想からも共感につながる対話の時間を十分に取る必要があると考えられた。

・環境について考える導入部分しか触れられなかったように感じた。レイチェル・カーソンについてももう少し深く知りたいと思った。また、少人数の特性を生かしてワークショップの時間をもう少し増やしながら、全員がもつ環境についての考えを共有することで、より深い学びが得られ、さらに新たな視点からの考察も可能であるように思えた。

## 5.2 第2回のレポート結果

「方法」に関すること：

・「環境についての個人的な経験」や「最近環境について考えたこと」等は、時々刻々とアップデートされていくものなので、毎回の環境カフェでイントロダクションとして互いに共有する意義はあるかもしれない。

・第1回と同様、「付箋紙に自分が『環境』について連想するキーワードを書いて、自然、社会、文化の観点に分けて、自由に語り合う」というエクササイズは、面白かった。

・いろいろなキーワードに対して、前もって予習することなく、その場で、自分の知見を基に述べるという作業は、回数を重ねれば重ねるほど深い対話ができるようになっていくと思うので継続したい。

・人数としても前回より少なかったため、多くの意見を交わすことができた。4、5人くらいが最適だと思えた。

「理解」に関すること：

・自然との関係から見た「文化」と「文明」の対比（図4）について理解できた。

・「人工」と「自然」の境界について、「人間の管理」あるいは「人間の影響」があるかどうかということ。

・「自然」「文化」「社会」に加え、「文明」「科学文明」などの言葉を含めて議論を進めてきたが、それはレイチェル・カーソンの古典にあったキーワードをもとに感性を共有するというものであった。それらの言葉が古典の中でどのように説明されていたかまで言及があると一

層自分たちの考えも深まり、理解も高まったのではと思えた。

「共感」に関すること：

・「自然」「社会」「文化」という3つの切り口から環境問題を捉えた際に、現代社会では純粋に「自然」を中心として問題を考えることが少なくなっているということ。

・「科学文明の病」とよばれた、人類が科学技術を利用してきたことにより地球規模の環境問題が発生してきたということ。

・環境に関わらずどのような言葉・事柄もさまざまな意味・側面をもち、それぞれが深く重なり合っているということを強く実感し、かつ納得したという点で非常に意義であった。

・文理を融合したアプローチというのは非常に共感できた。両方を組み合わせた研究方法というのは面白く思われた。

また、自然との関係から見た「文化」と「文明」の対比において、文化が「自然を守ってきた」ものであるという表現については、下記のような感想をえた。

・自然のもつ復元力に対する自然破壊のスピードが問題になるのであって、人類が自然に手を加えて変えている点では、古来の狩猟文化も現在の科学技術も変わらないと思った。問題になるのは現代社会の科学技術による自然破壊のスピードの速さであると考えられる。

「今後」に関すること：

・今後の学びを深めていくために「環境に関するキーワードを挙げて自由に語り合う」ことを継続したい。「(科学)文明」に代わる新しい人間の在り方・価値を発見したい。その為には、古今東西の環境技術、環境政策、思想家たちの言説、など幅広く、かつ、ミクロに深く知る必要がある。

## 6 おわりに

第2回のレポートでは、時間90分で4、5名の参加による開催が適当であり、専門的な知識の理解につながる解説に比べ、共感につながる対話の時間を十分に取る必要があると考えられ

た。第3回では、はじめに前回のレポートを参考に改変したスライドを示した。テーマに関する内容については、参加者のレポートをもとに改善するとともに図表の改変をおこない、次回と同様なテーマでの開催に活用することが必要である。

東京大学では、ほかに本郷キャンパス内において「環境カフェ本郷」(2016年度から2017年度にかけて合計9回)を高校生や学生、社会人の参加(3~7名)により開催した(多田 2018a)。その後も「『環境』とSDGsのかかわり—安全確保社会に向けて」(2018年6月30日)や「『環境問題は人間問題』—その解決に向けて2」(同年8月3日)のテーマでそれぞれ開催した。

また、つくばでも「環境カフェつくば」を2018年6月より交流サロン(つくば市)で月1回の定期開催をおこなっている。そこでは、「環境カフェ駒場」や「環境カフェ本郷」で取り上げたテーマと同様に「自然共生」や「生物多様性」、「SDGs」、「センス・オブ・ワンダー」などのキーワードをもとに開催をおこなっている。

今後は学内の開催だけでなく、「環境カフェつくば」のように社会人をはじめとする地域における開催の継続が望まれる。それによって地域コミュニティにおける環境問題をはじめとする社会課題の解決に向けた専門家と市民の社会対話の実践につながるものと考えられる。

もともと「環境カフェ」は、研究者と社会、すなわちさまざまな関係主体に向けた市民(高校生、学生、社会人)の交流による開催を目的とした社会対話であるが、「環境カフェ駒場」では学内に通う学生(単一の関係主体)に向けて開催をおこなった。そこで、このような学生に向けた授業や研究室セミナー、あるいは職場内でのセミナーなどでの開催を「環境対話」として、今後の活動を環境教育の中でさらに展開していきたい。

#### 謝辞

「環境カフェ駒場」に参加してくださった東京大学の学生2名と同大学院工学系研究科の院

生(修士、博士課程各1名)2名にお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 国立研究開発法人 国立環境研究所 憲章,  
<http://www.nies.go.jp/gaiyo/ken-kensyo.html> (accessed 2019-3-1).
- 日本リスク研究学会編, 2006, 増補改訂版 リスク学事典, 阪急コミュニケーションズ, 436pp.
- 鈴木善次, 2014, 環境教育学原論: 科学文明を問い直す, 東京大学出版会, 236 pp.
- 多田満, 2015, レイチェル・カーソンはこう考えた, 筑摩書房(ちくまプリマー新書), 176pp.
- 多田満, 2016a, 市民の交流による社会コミュニケーション 環境カフェの開催,  
<http://www.nies.go.jp/biology/research/institute/cafe.html> (accessed 2019-3-1).
- 多田満, 2016b, 「環境カフェ」—社会コミュニケーションの実践. ASLE-Jpn. Newslett., 40: 4.
- 多田満, 2018a, 社会対話「環境カフェ」の実践—「環境カフェ本郷」の開催を例に一, 日本環境教育学会関東支部年報, 12, 17-20.
- 多田満, 2018b, 社会対話の実践—「環境カフェ」を例に, 環境科学会誌, 31, 207-216.
- 多田満・戸祭森彦, 2018, 科学と文学による社会対話「環境カフェ」の実践—「『海辺』の生態学」をテーマに一, 環境教育, 28(1), 30-33.
- 暉峻淑子, 2017, 対話の定義, 対話する社会, 岩波書店(岩波新書), 258pp.